

火と氷のシャスタ山

小島烏水

青空文庫

山仲間から、アメリカで好きな山は何か、と聞かれると、一番先きに頭に浮ぶのは、シヤスタ山である。がそれは必ずしも、好きであるからではない、位置が南に偏り過ぎて、雪が早く融けるし、氷河は小ツぽけな塊に過ぎないし、富士山のように、新火山岩で、砂礫や岩石が崩れ易いので、高山植物は稀薄であるし、「好き」になるところまでは行かないが、それでも、最も多く心を惹かれる山である。何故というに、キヤリフォルニアからオレゴン州への、境近い街道に、山が聳えて、複式二重の成層火山、シヤスタとシヤスタと、二人の容姿端麗なる姉妹が、見る角度に依つては、並んで手を繋ぎ合つてもいるし、また背中合せに丈くらべをしているようでもあり、何となく人懐かしい山に見えるからである。その麓を汽車が通っていることは、丁度富士山の裾を、御殿場から佐野（今は「裾野」駅）、三島、沼津と、廻つて行くようで、しかも東海道が古くからの宿駅であるように、シヤスタ山麓の村落も、街道も、一八四八年以後の、米国西海岸への移民時代には、ある時には、印度人と白人とが必死になつて闘つたり、殊に一八五一年、シヤスタ山から、三十五哩離れたワイレカというところに、金鉱が発見されてからは、成金を夢見る山師たちが、鶴嘴をかついで、ほうほうたる髯面を炎熱に晒して、野鼠の群のよ

うに通行したところで、今では御伽話^{おとぎばなし}か、英雄譚^{えいゆうたん}の古い舞台になっている。かつて桑^サンフランシスコ

港

の古本屋で見たその頃の石版画に、シャスタ火山が、虚空^{こくう}に抛^なげられた白炎のように、盛り上っている下を、二頭立ちの箱馬車が、のろくさと這^はいずって、箱の中には旅の家族とおぼしい女交りの一連が、窮窟^{きうくつ}そうにギッシリ詰まっているが、屋根の上にはチョッキ一枚になって、シガアを燻^{くゆ}らしている荒くれ男たちが、不行儀に、臀^{しり}や脛^{すね}をむき出しに、寝そべっているところを描いたのがあつたが、延^のんびりとした大陸性の、高原に引く一筋路を、澄み切った大空の下に、おそらく、ガタピシと石ころに蹴^けつまずきながら、走って行く一台の馬車は、漂泊の姿そのもののように、一^{いち}抹^{まつ}の旅愁を引くのに充分であつた。

それは、カウボーイの土地である。未だ草分け時代の空気が、澱^{よど}んでいる。石と打^ぶつかつても、林に這^{はい}入つても、人と自然が肉迫するときのいきりが立っている。そのすべてを超越して、美しいものは、この山の隆々たる肉塊である。新火山のことだから、土の締まりは、しっくりしていない、むしろ危^{あや}かしいほど、柔^{じゅう}脆^{ぜい}の肉つきではあるが、楽^{らく}焼^きの陶器のような、粗朴な釉^{うわぐすり}薬^{やく}を、うツすり刷^はいた赤^{あか}る味^みと、火力の衰えた痕^{あと}のほてりを残して、内へ内へと熱を含むほど、外へ外へと迫って来る力が、十^{じつ}方^{ぽう}無障^{むしょう}碍^{がい}に

放射することを感じる。絶頂の火口は、今こそ休火山ではあるが、烈々と美を噴く熔炉になつてゐる。その美の泉を結晶したものは、絶頂から胸壁へと、こびりついているところの、氷河である。汽車の窓からも、その中の最大（といっても長さは二哩^{マイル}半位しかないが）のホイットニイ氷河が、銀流しに光つてゐるのが見える。そうして鉄路の附近に、氷河湖の跡が乾^ひからびて、今は青草の生えた牧場になつて、牛が遊んでいる。その辺の農家の石垣は、氷河の推^おし流した堆^{たい}石^{せき}を使つたりしてゐるのが、私たち富士山で、万年雪を物色したり、日本アルプスで、「カアル」の痕^{あと}を、氷河時代の遺蹟^{いなき}か否かと、論じ合つたりしている手合いに、いかに珍しかったらうか。

その氷河で思い出したが、私が桑^{サンフランシスコ}港^コにいたるとき、一九二四年九月十八日の夕、

新聞の号外売りが、声高く「ラッセン火山大爆裂、シヤスタ氷河大融解」と、大の字^づ尽くして呼んでいるので、耳寄りに思つて買つて見ると、いかにもシヤスタ山の、氷河融解、大洪水来と、拳^{こぶだ}大の活字で見出しがついてゐる。それは同日附け、ダンスミールからの電報で、「シヤスタの南東頂上^{けつそん}が欠損^{けつそん}してマック・クラウド谷が吹き飛ばされ、谷の痕^{こんせ}跡^きが、一筋も残らない」などと、誇張した報道であつたが、事實は、その前年の冬に雪が少なかつたので、氷河は既に五月の始めに、新雪から解放せられ、底部から溶解して、

空洞になり、激しい滝水で、氷河のトンネルが出来たのが、支持の力を失って、崩落（ほうらく）始め、岩石や砂礫（されき）を押し流して、山麓（かふ）の村々へと、冠（かぶ）せて来たのであったが、その当時、村では、二、三分ごとに、太砲の音のような響きが聞え、氷河を源とするマツク・クラウド河は勿論（もちろん）、サクラメント河まで水色が一変して、当分は濁りがつづいたということであつた。私は、その夕、電燈煌々（こうこう）として自動車の目まぐるしく飛び交（か）う賑（にぎ）やかな町中で、一枚の号外を握って、地質時代の出来事であるところの、氷河退却時代が、眼（ま）のあたりに見られるのだと思つた。飛び廻る自動車も、忙しそうに歩く行人も、右往左往に悲叫（ひきよう）遁走（んそう）する、あらゆる生物の、混乱の姿でもあるかのように取られた。

それから私は思う、外国の山を見るには、二つの見方が、経験されはしまいか、即ち（すなわ）自分の国の自然に似ている方面と、似ていない方面との二つである。蕪村であつたか誰だつたか、「花（はな）芟（はら）故郷（こきやう）の路に似たるかな」は、似た方からの見方だ。その反対に、似ても似つかぬところに、新しい驚異の心を抱かれることもある。シャスタに就いて言うと、氷河地形などは、我が富士山とは似ない方面だが、その他に於て、多くの似顔は、合せ鏡をしている姉妹でもあるかの如くに感じられる、そう思うとき、我々日本人に取って、シャスタ山は、もう錠前（おろ）を卸した山ではなくなつた。

私の観察したシヤスタを、漢文者流の口調を借りて、人間本位で言うならば、とかくに不遇の山水である。第一にシヤスタ山は、太平洋沿岸に近い山としては、早く発見された方ではない。同じ太平洋岸でも、有名な航海者「ヴァンクウバア」が、フッド火山や、ベエカア火山や、レイニニア火山を発見してから、三十四年も後に、シヤスタは、やっと存在を認められた。^{スペイン} 西班牙の探検者たちが、加州にシエラ・ネヴァダ山脈を見つけたよりも、三世紀も遅れている。メキシコの大火山、ポポカテペトルの第一登山が報告されてから、三百年も後になって、シヤスタは地図の上に戸籍が入った。しかし始めて登られたのは、一八五二年のことで、この辺の山としては、遅い方でもなかったが、あとから探検された他州（ワシントン州）の、レイニニア山の方に国立公園を取られてしまい、レイニニア山に関しては、詳細なる地形図、地質図や、一般民衆向きの、要領を得た説明案内などが出版せられて、世の中に紹介されているが、シヤスタには、未だそういうものは、何にも出ていない（あたかも富士山が「天地の別れし時ゆ神さびて」とか、古くから言われているがら、今日では、ややともすると、最近発見の日本アルプス上高地あたりに、国立公園を、お先に奪われそうな形勢であるが如くに）。第二にシヤスタ山は、初めは海拔一万四千五百尺と測られて、米国最高の山と信ぜられていたのに、その方は、今では、シエラ・ネヴ

アダのマウント・ホイットニーに、最高の位置を取られてしまい、精密なる実測の結果は、一万四千一百尺に減じて、レイニアの一万四千四百尺に比してすら、下位に落ちてしまった（あたかも日本最高の富士山が、久しく信ぜられていた三七七八米^{メートル}突という高さが、最近実測の結果、たとい二米突ばかりにしてもかえって減少して、いよいよ台湾の新高^{にいたか}山の^{やま}下位に落ちたように）。第三にレイニア山や、その属する所のキャスケード山脈を主として、探検する山岳会には、「マザマ」（ポートランド市）があり、「マウンティニア」（シアトル市）があり、また南の方シエラ・ネヴァダを研究する山岳会としては、盛大なるシエラ山岳会（桑港）があるにもかかわらず、シヤスタはその中間に占居するため、どっちつかずの継子^{ままこ}扱いを、両方の山岳会から受けていること（あたかも日本アルプスや、秩父山脈が、登山家の興味の中心になって、離群別居の富士山が、大分閑却される傾向があるように）。第四は、山の不幸は、住人の不幸になって、シヤスタ山と、切っても切れぬ歴史中の人を、埋没しようとしている。即ちシヤスタ山を、世に紹介するために、全力を尽くした土地草分けのシツソン翁（J. H. Sisson）という開拓者のために、シツソンという地名が出来、同名の停車場まであったのが、いつの間にか、土地がシヤスタ・シチイと改名せられて、あたらしツソン翁の名は、草莽^{そうもう}の間に埋められようとしている（あ

たかも富士山の役行者えんのぎようじゃの名が、今日忘れかけて、日本アルプスの先達、ガウランドだの、ウエストンだのという名が、若い人たちの口の端に上るようになった如くに)。それから第五、第六の「あたかも」が、未だ続いて挙げられるが、もうその点は打ち切つて、私たち同行四人が、シヤスタ山に登ったのは、大正八年（一九一九年）九月十一日のことで、未だこの山の草分けを記念するための、シツソンの名が残っていた時分であつた。その頃、シヤスタに登る人は、一と夏を通して、百人か百五十人位と登録せられていたし、殊に日本人の登山としては、私たちが初めてのものであつた（前に日本人が登つていたという記録があるならば、是非ぜひ知らせていただきたい）。その私たちの登山にしながらが、時間不足のために、絶頂の剣ヶ峰ともいふべき、シヤスタ・ピークまでは、達しなかつたのだから、一個の予察地形図をスケッチしたぐらいの、軽い気分で読んでいただきたい、何も登山記だからと言って、死に身になつてコチコチと緊張しなければならない、というものでなからう。

シヤスタへ行くには、私たちの居住地、桑港から、オレゴンへと北向する南太平洋鉄道の便を借りるのである。汽車はサクラメントの大河に沿うて走る、川の底には、堅い凝灰岩などが露出しているが、シヤスタを距へだたること、五十哩マイル位のところから、熔岩が、両岸に

テレース
段丘を作っている。そして段丘の上に、小舎が建てられたり、馬鈴薯や唐黍^{とうきび}が植えられたりして、この辺の畑としては、手入れが届いている。その熔岩は、シヤスタの南麓^{ほとばし}から迸^{ほとばし}ったのであるが、ちよつと富士山から、桂川に沿うて猿橋まで達しているところの「猿橋熔岩」に似ている。しかし猿橋の方では、熔岩の延長八里ぐらいで、厚さも今日見らるるところでは、四、五米^{メートル}突ばかりの薄い皮であるが、サクラメントへ流れるシヤスタ熔岩の厚さは、五十呎^{フィート}から二、三百呎に達している。川上の方へ「シヤスタ」が、白い炎を爛^{らんらん}々と光らして、汽車の窓から、大抵は右に見えるが、「左富士」のように、左に見えることもある、それほど川は、S字の環を繋^{つな}ぎ合っている。前に述べたシツソンの停車場へ着くまでには、ダンスミールという、材木を伐^きり出すので賑^{にぎ}やかな古駅があり、その次には、シヤスタ・スプリングといって、シヤスタ火山の基盤熔岩なる岸壁の間から、地下の伏流が、富士の白糸の滝のように、千筋^{ちすじ}とまでは行かなくとも、繊細な糸^{さば}を捌^{さば}いて、たぎり落ちるところもある、「花^{はな}茨^{いばら}故郷の路に似たるかな」が、ますます思い出される。

シツソンという寂しい停車場は、富士ならば、御殿場駅に当たるところであるが、この方面から見たシヤスタは、一座の尖^{とが}れる火山にしか見えない、それが、シヤスタの主峰であ

るが、汽車が北へ廻るに随つて、いつの間にか、主峰の傍に、また一つの同じような火山が出て来る、それはシヤスチナで、高さは日本の富士山と同じく、一万二千三百尺であるが、シヤスタ主峰は、それよりも更に、約二千尺高く、海拔一万四千六百二十二尺と註せられてゐる。火口は、シヤスタに一つ、シヤスチナに一つ、その双峰を繋ぎ合わせるところの、プラットフォームにも、一つあるという話であるが、私はそれをよく知らない。シヤスチナは、多分側火山として噴出したのが、一体の双生児のように、シヤスタと癒合したのだろうと思う。成立の原因は違つても、富士の愛鷹山の頂上部が、仮に爆裂飛散せずに原形を保存していたとすれば、シヤスチナ位になっているかも知れない。

だが、シツソン、ウイードあたりから、仰ぎ見るシヤスタの偉大さは、アルプス式の山々に見ることの出来ない鮮明美がある、孤にして閑である、独にして秀で、単にして完き姿である。日本アルプスでも、そうであるが、アルプス式の山は、高台の上に乗つかつて、群峰になつてゐるから、槍ヶ岳とか「マツタアホルン」とかいう特異の山形を除いたら、遠くからは、どれがどれやら、個々の山名がちよつと解り兼ねる場合もあるが、シヤスタはそうでない、富士もそうである如く、一見分明である、足許から山上までの直径の高さは、モン・ブラン以上である（移民時代の一愛山家は、「シヤスタに登つてモン・

ブランを笑ってやれ」と言った）。その立体構成面の威嚇的偉大さを、駭くべき簡単なる曲線で、統整して、しかも委曲に至つては、富士で謂うところの八百八谷の線から、おのずと発生する凹凸面の、複雑なる入り乱れのために、眼もあやになることを如何ともしがたい。

私たち一行四人は、九月九日の夕、シツソンに着いて、駅前のパーク・ホテルというのに泊つた、目ぼしい商家といつては、よろず屋風の荒物屋と、鍛冶屋があるくらいのもので、私は靴屋に案内してもらい、氷河ににらないう心に、裏皮を貼りつけて、釘を打ってもらつたが、旧式の轆轤ろくろを使って、靴屋のおやじが、シュツ、シュツと、線香花火式にやってくれた。登山の準備をしたくも、碌ろくなものがないところで、この節の日本アルプスの登山口の、設備の方が、よほど行き届いているくらいだから、その貧弱さの、見当がつくであろう。

山麓帯の裾野で、日に焼けて、疲労をひどくしたくないので、定め of 行程は短いにもかかわらず、翌十日は朝出しゅったつ立した、馬を五頭、一頭は荷物を積んで、案内者の、チャアルス・グーチという男が、裸馬に乗り、アルペン杖を横たえながら、片手で荷馬車を曳ひいて先登に立つて行く。私は馬に慣れないので、少なからず閉口したが、同行中の神田憲君

は、この仲間では馬術の達人で、ややともすれば遅れがちな私の馬の綱を、時々引いてくれた。

本街道から製材所の横を切れると、もう既に裾野であるが、富士のそれとは違って、乾^{かわ}き切った砂漠で、セージと通称する白ツ茶けた草や、マンザニタと呼ばれるところの、灌^{かん}木^{もく}などが茂^もつて、馬蹄の砂が濛^{もう}々と舞^まいあがるのには、馬上面^{おもて}を伏せて、眼をねぶるばかりであつた。

それでも、森林帯に入るとさすがに涼しい、中でもシヤスタ縦^{もみ}と呼ばれる喬^{きよう}木^{ぼく}の一種は、この山、特有とまでゆかなくても、この山の産として最も名高いのであるが、富士の落葉松^{からまつ}を、富士松と呼ぶたぐいであるかも知れない。なお登ると、俗にホワイト・バーク・パイン（白皮松）と呼ぶ喬木が出てくる、高さは二百尺位に達するのは珍らしくはない。土地の人たちは、この森林帯の立派さを艶^{えん}説^{ぜつ}しているが、レイニア火山や、ベエカア火山の、それに競べると、さほどの物ではない。ホールス・キャンプという平地に出で馬を下り、野営の仕度をする、海拔九千尺、水も少しはある。今は（一九二二年の春から）このところに「シヤスタ・アルパイン・ロッジ」という、立派な山小舎が建設されたそう、毎年六月十五日から九月十五日まで「小舎開^{こやびら}き」をやつて、一年に四、五百人の

宿泊者は、欠かさないという話であるが、私たちの登った頃には未だ小舎はなく、シエラ山岳会考案の「睡眠袋」を馬に積ませて来たので、みのむし 蓑虫のように、その中にすッぽりもぐ 潜り込んで寝たが、乾き切った小石交りの砂地の上で、日本アルプスのように、柔らかい草原をしとね 褥にするぜいたく 贅沢は、思いも寄らず、睡眠不足がたた 祟つて、翌あ くる日の登山には、大分こたえた。

森林帯の尽きるところから、大雪溪が始まるが、この雪溪の長々しい傾斜は、さすがに白馬岳あたりの比ではない。翌くる十一日の朝、一行はこの単調の雪溪を、のたり、のたりと登って、巨大なたいせき 堆石を戴いた雪の「テール」の側へ立って写真を撮ったり、雪の穴ぼこの中へ、更紗さらさの紋でも切り簞はめたように、小さい翼を休めているところの、可憐かれんなる高山蝶を、いじくつたりして、雪溪を、ものの三千五百尺ばかり登ると、富士山の胸突八丁にもたと 喻えられるところの、火口壁へとぶつかった。これを越えると、絶頂たどに辿りつくことになるので、ここでさえ、高さは一万三千尺近い見当である。最後の噴火のあったという「レッド・ブラツフ」のあか 赭ら岩が、眉まゆを焦こがすばかりに、近くそび 聳えている。足許あしもと一面に、熔岩や、焼石がろうぜき 狼藉して、歩きにくい。生あいにく 憎時計を見ると、かれこれ午後二時に近い、空気も稀薄になり始めて、絶頂まで、遅々ちぢたる足取りでは、今夜中にホテルまで、

戻り得られるか否かも、^{おぼつか}覚束ないので、ここから下山することにした。

シヤスタへの登路は、氷河踏査を主とするならば、私たちの路を取らずに、南のマツク・クラウド村から登るか、またはやや北行して、シヤスタとシヤスチナ間の、^{くぼち}窪地を^{めざ}目指して登る方が、よかつたということを、後から聞かされた。後の路を取れば、九千尺の高度から、ホイットニイ氷河の末端が出現して、「クレツヴァス」や、堆石の状態がよく判明するということであつた。

登山記としては、これだけだ。短くして、^{あつけ}呆気ないのは、私も知っている、しかしシヤスタ山は、我が富士山の如く、登る山であるが、同時に眺望する山だ。この山を中心にして、周囲の展望は変化する、大空へ掛けた額面として、横から見たり、裏返しに見られる山だ。

私は、その後、幾回となく、山麓を通過した、半周した、約四分の三まで廻^{まわ}つた。かくて視^みたところを綜合して言えば、山の頸部は、三十五度の傾斜から、次第に緩和して二十度、十五度、十度と、^の延びりした線を、大裾野へ引き落し、末端は五度位にちぢんでいくが、富士山の如く、草山三里、木山三里、石山三里という割り当ては、シヤスタには応用出来ない。草山は、まあいいとして、木山はシヤスタでは、^{やちたい}谷地帯になつてゐるし、^{こと}殊

に石山に該当するところは、万年雪と氷河の喰い込みで、岩頸は、篋でえぐつたように「サアク」の鈴成りが出来ているから、サアク帯と呼ぶ方が適當である、その「サアク」からは、言うまでもなく、氷河が流れていて、九千尺以上に五個あるという話であるが、私の望んだのは、ホイットニイ氷河と、南方のマック・クラウド氷河の二つである。前者は前にも述べた通り、シャスタとシャスチナの間の、鞍部に懸垂しているが、アルプスのベルニーズ・オーバアラント山地あたりの大氷河に比べると、恐らく雛形ぐらいの小さいものだろうが、それでも擬似氷河ではない。小さいなりに、完全な真氷河であることは、「クレツヴァス」の凹凸が、かなりの遠くから肉眼でもハッキリと見えるし、大氷河でなくては、滅多に見られないところの、側堆石までを具備しているのも伺われる、終堆石は弦の切れた半弓を掛けたように、針葉樹帯の上に、鮮明に懸かっているのみならず、そこから流下した堆石は、累々として、山麓に土堤を高く築いている。ただ巨大な堆石が、現在見当らないのは、何分にも、氷河が小さく、谷の削り方も浅くて、「剥ぎ取り」が、深く利かないためであろう。もう一つのマック・クラウド氷河の方は、現在では最小の氷河であるが、山麓同名の村に、「マッド・クリーク」という小流があつて、その岩壁には、氷河の引ッ掻いた条痕が、鮮明に残っていると見ると、昔は今

よりも、大きな氷河であつたらしいことを示している。

要するに、シヤスタの氷河は、この山の属するキャスケード山脈の最南端だけあつて、キャスケードの氷河としては、一番小さいものであることに疑いはないが、仮に、富士山の氷河が成立したとしたら、あるいはまた、日本アルプスの剣岳や立山群峰が、もう五百メートルも高く、氷河の小塊が出来るといふ想像が、容れられるとしたら、まあこんなものだろうと推測せられるだけに、何となく、捨てがたく思われるのである。

ここで、冒頭に戻つて同じ言葉を繰り返かえす、アメリカで好きな山は何かと聞かれると、一番先きに頭に浮ぶのは、シヤスタ山である、それは必ずしも、好きであるからではないが、最も多く心を惹かれる山であると。

終りに、この一文を、同行四人の中、馬術の達人であつた神田憲君の霊前に献げる。同君は、その後帰朝して、過般の大震災で、鎌倉で圧死の不幸に遭われた、他の二人は、野坂滋明君と国府精一君とである、今は米国と日本に別れていて、共に健在である。

青空文庫情報

底本：「山の旅 明治・大正篇」岩波文庫、岩波書店

2003（平成15）年9月17日第1刷発行

2004（平成16）年2月14日第3刷発行

底本の親本：「改造」

1929（昭和4）年7月

初出：「改造」

1929（昭和4）年7月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5,86）を、大振りにつくっています。

※初出時には副題「富士山との比較考察」がありました。

入力：川山隆

校正：門田裕志

2010年2月3日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

火と氷のシヤスタ山

小島烏水

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>